

ハイデルベルク信仰問答より

問 86 私たちが、自ら何の功績もなしに、キリストの恵みによって、私たちの罪とその悲惨な結果から救われたのであれば、なぜ、私たちはよい業を、行なわねばならないのですか。

答え その理由は、キリストがご自分の血をもって私たちが贖ってくださったように、その御像^{みかたち}に似せて、聖霊により私たちが生まれ変わらせてくださるのであります。従って、それは私たちが全生涯かけて主の恩恵に対して神に感謝を表し、また、神が私たちによって崇められるためであります。さらに、それはまた、私自身がその実によって自分の信仰を確信し、私たちの敬虔な行為によって隣人をキリストに導くためであります。

本問答書は問 86 から第三部に入ります。念のため全体の構成を確認しておきましょう。

第一部：人間の罪と罪責——神の律法（問 3～11）

第二部：人間の救いと自由——イエス・キリストにある神の恵み（問 12～85）

第三部：人間の感謝と服従——聖霊による新しい生活（問 86～129）

※上記の表現はアンドレ・ペリーに依っています。

第三部は更に、以下のような大枠で構成されています。

「十戒」の解説：問 92～115

「主の祈り」の解説：問 116～129

十戒の解説に入るに先立ち、救われた人が「善事」に励む理由について説明されます。なぜ敢えてこの説明に時間をかけるかということ、それが「救いに至るための善事」ではないことを明らかにするためです。

問 86 では、これまで第二部全体で語られてきた「恵みによる救い」を前提とし、人が救われるのは行ないによるのではなくただイエス・キリストの恵みであるならば、どうしてキリスト者は善い業に励む必要があるのかという疑問を投げかけています。これはキリスト者の意識の中で絶えず葛藤を生んでいる問題であり、よく整理しなくては律法主義の罫にはまり込みやすいところでは、人は救われる前、正しくありたいと願いながら神の要求に適う生き方ができない自分に絶望するばかりでした。神の義の基準に到達できない現実、何らかの悪習慣が捨てられないときばかりではなく、怒りのコントロール、言葉の制御、悪しき思考そのものを抱かないなど、より根本的なあり方におけるつまずきにおいて直面します。救いというのは、私たちが人間性を改善したから与えられたのではなく、ありのままの姿で（そのような存在だからこそ）神によって泥

沼から引き上げられた出来事でありました。このような、救いの一回的な御業を「義認」と呼び、それは私たちの状態とは関わりなく神が宣言してくださった永遠に変わることはない約束です。

さて、ここからは救いの漸進的^{ぜんしん}な側面としての「聖化」と関わる話になってきます。無条件に罪から贖われた私たちは、引き続き以前の生活をそのまま行なっていてよいかというと、そうではないと聖書は語っています。神の子としての身分がまず与えられ、それにふさわしく造り変えられていく過程を継続的に見ていくのが、地上での残りの日々の歩みです。その道筋の中で、私たちは多くの罪から解放され、自己嫌悪の縄目からも解かれていくでしょう。答えの中で「**その御像^{みかたち}に似せて、聖霊により私たちを生まれ変わらせてくださる**」と言われているように、失われていた「神のかたち」が取り戻されていくのです。

以下では、答えの中で語られている「善事に励む四つの理由」を見てまいりましょう。

① 私たちが全生涯かけて主の恩恵に対して神に感謝を表し（感謝）

キリスト者の善事は、罪より贖い出してくださった主への感謝を動機としています。主のものとされた私たちは、律法的に善を行なうのではなく、主と共にある平安と喜びに押し出されて自分にできることを考え行なうようになります。

② 神が私たちによって崇められるため（賛美）

神の子とされた新しい生き方をしているキリスト者の姿は、神の栄光を表すようになります。人を造り変えることのできる神の力が現れるからです。

③ 私自身がその実によって自分の信仰を確信し（信仰の確信）

私たちは、自分が御霊の実を結んでいることを知るとき、目には見えないけれど信仰を持っているということが確信できるようになります。不可視的な救いが可視的になる瞬間がある、それが「御霊の実」を見るときです。

④ 私たちの敬虔な行為によって隣人をキリストに導くため（隣人への証）

他人に対する愛の業、誠実な行ないは、人から信頼を受ける立場へと導いていくでしょう。誰かから「あなたのようにになりたい」と思っただけになるようなとき、その人への宣教は既に始まっているのです。

キリスト者としての歩みの中でも、私たちは多くの失敗をするものです。自覚的な罪を犯すとき、私たちは一つの言い訳を自分の中に作り出しやすいものです。人間とは根本的に悪い存在なのだから仕方ないのだと。しかし、その考えは自分の中にある自己嫌悪を解決するものではなく、再び自らを罪に縛りつけるものとなります。むしろ聖霊は、私たちが良心に従って行動できるように都度力を与えてくださることを忘れないようにしましょう。そのために、どんなときにも祈りをもって物事に取り組んでいきたいと思えます。